京大人文研　京に残る資料の活用を探るセミナー　初回は 桑原 武夫

幅広い交友から 創造的場をつくる

書簡や遺品から読み解く

桑原武夫の功績について語る根津准教授（右）と岩田学芸員（京都市左京区・京都大人文研）

京都大人文科学研究所（人文研）が、京都の街に蓄積された文書や絵画といった資料の活用法を探る連続セミナー「『みやこの学術資源』の継承と発信」を開いている。初回は、戦後の人文学をリードした思想家桑原武夫（1904～88年）の功績について、彼が残した書簡や遺品から読み解いた。

講師を務めたのは、戦後ジャーナリズム史が専門の根津朝彦立命館大准教授。桑原が、異分野の研究者を集めてルソーの共同研究を手掛けるなど、戦後の人文研をけん引し、知識人のネットワークの中心にいたことに着目し、「個人の研究業績ではなく、創造的な場をつくった人物として評価できるのではないか」と研究の狙いを示した。

根津准教授は、人文研などが所蔵する桑原の膨大な書簡や手帳、パスポートなどを分析。司馬遼太郎や小田実、鶴見俊輔、高橋和巳らとのやり取りから「多くの研究者が桑原の人間性や知性に触発された」と話し、晩年の手帳に残された年賀状の数（750枚）などから交友の広さを想像した。

さらに、発言すること、議論することの大切さを繰り返し説いた桑原について「一市民、一主権者としてのあり方を示し、日本社会の良識を向上させた」と指摘。実証的な評価が難しい功績にも光を当てて、人と人を結びつけるネットワークの重要性をあらためて考えた。

また昨年、没後30年に合わせ、出身地の福井県で企画展を催した「福井県ふるさと文学館」の学芸員岩田陽子さんも、学生時代の成績表や日記などを紹介。雑誌「四季」の創刊をめぐる詩人の丸山薫からの手紙も取り上げ、「とにかく人が好きで、友人たちの調整役を担っていた」と読み解いた。

セミナーでは、7日に「ガンダーラとバーミヤーン」、14日には「京大人文研と社会運動史研究」を予定している。いずれも京都市左京区の京都大人文研で午後6時半開演、無料。（阿部秀俊）